

特別寄稿

平成26年度 緩和ケア研修交流事業研修の体験発表

盛岡赤十字病院 緩和ケア病棟

鈴木 絵理

はじめに

緩和ケア病棟に勤務している中で、取りきれない倦怠感や呼吸困難感などの症状緩和の難しさ、今まで出来ていたことが出来なくなり弱っていくつらさや不安、周りに迷惑をかけるつらさなどから死にたいと訴える方へのスピリチュアルケア、支えるご家族のつらさや大切な人を失うという悲嘆のケアの難しさを感じている。中でも臨死期にどのように寄り添い、どのような言葉をかけて差し上げたら、穏やかな看取りを支援できるのか悩む日々である。

今回、緩和ケア研修交流事業研修に参加する機会を頂き、他施設では、どのように患者・家族と関わり、患者の尊厳を守り最期までその人らしく生きられるようケアをされているのか学び、今後の自身の看護と所属する緩和ケア病棟のケアの向上に少しでも活かしていきたいと考え、以下の目的で研修参加を希望した。

I 研修目的

1. ホスピスではどのようなケアが行われているのか実際を知ることで、自己の看護を振り返るとともに、自身の所属する緩和ケア病棟との違いや参考にできる事を学ぶ。
2. 患者・家族の心のケアと情報共有がどのように行われているのか学ぶ。
3. 看取りの説明がどの時期にどのように行われ、臨死期のケアがどのようにされているのか学ぶ。
4. 合同カンファレンスの実際と他職種とどのように連携しケアをされているのか学ぶ。

II 研修の実際

1. 研修施設：光が丘スベルマン病院

2. 研修スケジュール

午前

朝のお祈りに参加

深夜勤者からの申し送り・ミニカンファレンス
見学

病棟師長さんよりオリエンテーション、ホスピス紹介、病棟内見学

回診同行（1名の患者さんの回診を見学）

お亡くなりになられた患者さんのお別れ会に同席・お見送り

午後 合同カンファレンス見学

カルテ・看護記録見学

パストラルケアボランティアよりパストラルケアについてお話を伺う

屋上庭園見学

情報交換、交流

3. 研修内容

光ヶ丘スベルマン病院は、市民グループ「ホスピス設置を願う会」の長年の活動により、平成10年5月宮城県では初めての緩和ケア病棟（ホスピス）として開設され、今年で16年目を迎える歴史あるカトリックのホスピスである。病床数20床、医師2名、看護師17名の他、多くのボランティア、パストラルケアワーカーがチームの一員として活躍されている。木の温かみと光溢れる広々とした空間、静かに流れる時間は病院であることを忘れてしまうかの様な穏やかな環境で、ナースコールはほとんど鳴ることがない。症状緩和がな

されており行き届いたホスピタリティーの高い看護が提供されている。看護師は各々エプロンを着用しており家庭的な雰囲気であった。また、午前、午後といらしてお茶のサービスや患者・家族の対応をされているボランティアや、心のケアをされているパストラルケアワーカーの存在は大きく、患者さんに優しく寄り添うその対応は素晴らしく、心のケアが充実していた。ボランティアコーディネーターやパストラルケアワーカーは申し送りやカンファレンスにも参加されており、患者・家族の状態や情報の共有が出来、緩和ケアチームの一員として認められ尊重されており、誇りを持って活動されていた。

看取りの説明は病状とタイミングを見ながら、時期を逃さず行っていると説明を受けた。看取りの説明には「これからの過ごし方」「愛するひとを見送るために」の2種類のパンフレットを用いており、家族の気持ちに配慮した言葉で、看取りまでのお身体の変化や家族がどのように寄り添っていけばよいのか、必要なことが分かりやすく記載されていた。

臨死期のケアについては、看護師から家族に疲れていないかなど、こまめに声を掛け家族の休養にも配慮されていた。

合同カンファレンスは、毎週水曜日に行われており、医師、看護師の他、薬剤師、リハビリテーション、ボランティアコーディネーター、パストラルケアワーカーが参加し、医師の司会のもと、入院患者全員についての情報共有がなされていた。

Ⅲ 考 察

他の施設を知ることで、四季折々の豊かな自然に囲まれた当院の環境の素晴らしさや看護師の意識の高さ、チームワークの良さに気付くことができた。看取りの説明においては、当院で使用している看取りのパンフレットは少し内容が多すぎると感じていたので、参考出来る部分が多くあり、今後スタッフと検討しながら見直していく必要がある。

また、スピリチュアルワーカーの方からお話を伺えたことは、患者・家族への精神的ケアで悩んでいる私にとって大変意義深いものとなった。緩和ケアチームには、異なった視点で見ることの出来るスピリチュアルカウンセラーがいた方が良いと話されていた。残念ながら当病棟にはいないため、スタッフ同志でお互いに支え合っているように、つらさや弱さを自由に話し合える雰囲気を作り、チームとしてのスピリチュアルティを高めていきたい。そして、自分の価値観にとらわれない心で患者・家族に寄り添い傾聴できるよう努力していきたい。

人生の終りとその過程におけるつらい症状を緩和すること、死が近づいた時適切なケアを提供すること、これらはやはり医療者の誰もが担うべき使命であり、基本的な役割である¹⁾。終末期のがん患者に出現する身体症状は多様であるが、症状緩和を図ることは最期まで「その人らしく」生きることを支えるために重要である。緩和ケアに関わる多職種と連携を強化して、その時に出来る最善のケアを提供していきたい。私達看護師は、患者・家族の人生のかけがえのない時間に関わることの重みと責任を感じながら、最期まで患者と家族の思いをつなぐケアを継続させていくことが大切である。

おわりに

緩和ケア研修交流事業は自己の看護を振り返る良い機会となり学びも多いため、今後も継続していただけるよう期待します。

(本文の要旨は平成27年5月30日 日本ホスピス緩和ケア協会東北支部会総会で発表した)

文 献

- 1) 志麻泰夫, 山岸暁美: 死が近づいた時の症状マネジメントの重要性, 緩和ケア, Vol.24 No.4, P 258-259, 青海社, 2014
- 2) 藤原志寿子: 臨死期における家族ケア, がん患者ケア, Vol. 5 No. 3, 日総研, 2012